

随 想  
~~~~~

良い英文を書くために

—日本人の英文技術論文—

工藤 英明\*・Bradley Dodd\*<sup>2</sup>

工藤：「どういふ間違いか、日本鉄鋼協会から私に、日本人の英文技術論文について評論的随想を書くよう依頼がありました。私は 20 年以上前に貴国の Manchester に半年足らず住んだ以外、英語を話す国に住んだことはありません。もしかしたら、だいぶ昔に、英文要旨の書き方について生意気にもある学会誌に 1 度書いたことがあるので<sup>1)</sup>、その前科が祟つたのかも知れません。しかし、お断りしようと思つているうちに、ふと貴君のことを思い出しました。

貴君は前の Birmingham 大学時代から、交際した日本人留学生に恵まれていた (?) せいか、“Japanese English” や “Japlish<sup>†</sup>” がよくわかりましたね。数年前に 1 年間、学振招へい研究者として私の大学に居た間、日本語の方はさつぱり進歩しませんでした。が、“Japanese English” 理解の腕には一層磨きをかけました。滞日中も、帰国して Oxford 大学へ行つてからも、日本人からずいぶんたくさん英論文の手入れを頼まれたのを知っています。私でさえ意味の取れない日本人の英論文の真意をちやんとつかんで、英文原稿を直す貴君の才能にはまつたく恐れ入ります。それだから、“Journal of Mechanical Working Technology” が創刊される時、編集主幹の Travis 博士に、日本人の投稿論文の校閲者として貴君を推薦したという次第です。覚えているでしょう。そういう訳で日本人の英論文について貴君が経験を話して下さればきつと面白く役立つ随想ができると思えました。いろいろ忙しいとは思いますが、一つ日本の読者のためにお願い致します。」

Dodd：“Thank you for remembering me. I think I understand ‘Japanese English’ or even ‘Japlish’ pretty well. But you should always remember that it is not only foreign scientists who sometimes have difficulties writing English manuscripts. English scientists including me also have problems as you know!”

工藤：「日本人並みに謙遜しますね。でも鉄鋼協会もまさか完璧な英論文をねらつてこのシリーズを企画したはずはありません。六、七十点の英文になればよいと考えて、気楽に意見を言つて下さい。」

Dodd：“Well, one of the major errors in English manuscripts written by foreigners is the tendency to translate directly from their mother tongue.

After some rearrangements of the English words, the authors think this may be, or even is, correct English.”

工藤：「日本語を英文に直訳するな、ということは、日本でもしよつ中指摘されています。私の滞英中、Manchester のある下宿に日本の会社から実習に来ていた 2 人の日本人がいました。かれらは英語の上達のために、いつでも英語で話し合おうと決心しました。自分たちはそれでそれなりにうまく理解しあつていたのですが、ある日悲劇が起こりました。下宿の娘に、『レディの前で分からない外国語を使つて話し合うのは失礼よ。』と叱られたのです。かれらはそれ以来英会話 (?) をやめたそうです。日本人に分かりやすい英文はよくない英文ということになるのでしょうか。」

Dodd：“……”

工藤：「しかしそう言われても、日本人にとって日本語は生れてからずつと、ものを考えるために使つてきた手段ですから、それからおいそれと離れるわけには行きません。まだ英語で考えることのできない日本人が、日本語で考えたことを英文にするコツは何かあるのでしょうか。」

Dodd：“In order to overcome this most important problem, I recommend that authors think carefully about what they wish to convey to the reader.

After this, the thoughts or notes should be written in simple straightforward sentences. Always be concise and avoid verbosity!”

工藤：「さすが紳士の国の紳士だけあつて、日本人の英論文の最大の弱点をさり気なくスマートに指摘していますね。私など育ちが悪いせいか、もつと露骨に言いますが、日本には日本語で書かれていたつて、何のために、何を言おうとしているかさつぱり分からない論文がありますよ。もし、研究そのものが論理的で筋道が立つているなら、その日本語の論文も筋が明快なはずだし<sup>2)</sup>、それだつたらそれに従つて英語の単語を並べるだけでも、同業の英語国民には十分理解してもらえ、と言うのが私の持論です。本当の自然科学や技術の研究論文なら、発想方法はそう変わらないのではないですか。」

<sup>†</sup> ‘Japlish’ とは、日本人が正しい英語のつもりで作る ‘Japanese English’ とは違つて、英語をもじつて創造した言葉のことである。ナイター、セビロなど。

\* 横浜国立大学教授 工博

\*<sup>2</sup> The University of Oxford Ph. D.

Dodd : “.....”

工藤:「それにしてもたしかに、日本語の論文は立派でも、英文になると would や could や might がやたらに出てきて、もう少しはつきり定量的に物が言えないか、とじれつたく感じるがありますね。貴君が‘straight-forward’と言われたのはまつたくびつたりです。」

Dodd : “For foreigners who have difficulty constructing long sentences, I recommend that they should use short sentences with simple word-order, that is, ‘Subject-verb-object (with no clauses)’. When in doubt about an English sentence, think of a simpler one !”

By writing sentences with a simple construction, authors can avoid making some of the common pitfalls in written English. To quote an example from a Japanese journal, the sentence : ‘Influences of pretreatments to tensile properties are not practically observed.’ is wrong and roundabout. A correct and concise version of this is ‘The tensile properties are unaffected by pretreatment.’ The simpler the sentence the better !”

工藤 : 「なるほどそうですね。そうすれば自分で何を言おうとしているかもよく分かりますものね。それから、論文の物語の主な筋と副次的な筋とをうまく分けて文を論理的に配列しさえすれば、やたらに Therefore や Then や And とか、Moreover や However を文頭にもつてきて、文脈を無理につなげる必要がなくなるのではないのでしょうか。日本人の技術論文に溢れているこの接続詞は、前に言った would や could などとともに気になる点です。私は、この接続詞をできるだけ使わないようにすることが、英論文上達の一つのつぼだと思うのですが……」

Dodd : “That could be true.”

工藤 : 「貴君は表現を簡潔にするとともに、初めは一つの文章を短く区切ることをすすめています。しかし慣れてくれば、句や節を含む文を書いてよいのでしょう。」

Dodd : “Yes, it is a matter of course. For example, a beginner may write,

‘Mild steel tensile specimens were tested in a hydraulic machine. The machine has a capacity of 50-tonnes. The applied strain rate was 2 sec<sup>-1</sup>.’

For the more advanced writer, he will naturally graduate to longer, more smoothly flowing sentences like,

‘Mild steel tensile specimens were tested at a strain rate of 2 sec<sup>-1</sup> in a 50-tonne capacity hydraulic machine’,

or,

‘Mild steel tensile specimens were tested at a strain

rate of 2 sec<sup>-1</sup> in a hydraulic machine which has a 50-tonne capacity’.

But I would like to repeat that the expressions should be as simple and straightforward as possible.”

工藤 : 「ところで、かなり英語の達人な日本人でも冠詞の使い方には苦勞するようです。もちろん、私が英文を書くときも、結局どうにも分からないのは冠詞ですし、確か貴君にも、冠詞を一番多く直されました。冠詞の用法は、英語国民でも説明しにくいとのことですが<sup>3)</sup>、何か日本人に為になるようなヒントを貰えないでしょうか。

Dodd : “The only thing I can say about it is that the authors should abide by the grammatical rules for the use of articles rigidly, ignoring any truncated sentences they may read. It is common practice among editors of scientific journals to truncate titles, abstracts and figure captions of papers by missing out some of the articles. You must not be confused about article usage by reading such journals”.

工藤 : 「そうですね。冠詞についてそれ以上のことは具体例を挙げる以外できないでしょうね。ほかにまた何か、気がついたことはありませんか。」

Dodd : “I observe that a common fault in Japanese manuscripts is the use of a number of different past tenses. Therefore, be consistent with tense usage”.

工藤 : 「そう言うこともありますか。気が付きませんでした。ところで何か良い参考書を推薦してくれませんか。」

Dodd : “I recommend as a book of synonyms : ‘Roget’s Thesaurus’ (Penguin) and as a valuable book explaining how to write clear concise English : ‘The Complete Plain Words’ by Sir Ernest Gowers (Penguin).”

工藤 : 「いろいろ有益な助言有難う。」

Dodd : “Not at all. Let me add one more point on this occasion. It is interesting for me to note that even the translated formal titles of Japanese journals and organisations are often incorrect! For example, the present ‘Journal of the Japan Society for Technology of Plasticity’ should be ‘The Journal of the Japanese Society for the Technology of Plasticity.’”

工藤 (独白) : 「うーむ。これはあちこちにいろいろと差し障りがありそうだな。」

#### 文 献

- 1) 工藤英明: 塑性と加工, 7(1966), p. 106
- 2) 工藤英明: 同上, 21(1980), p. 589
- 3) 小林史郎: 同上, 7(1966), p. 108